通訳をしていた頃の経験についてお話しさせて頂きます

① 通訳は外国語ができれば誰でもできる？

通訳は外国語ができれば誰でもできる、と思われるでしょうがそうでもないのです。
他人が何を言ったのかを正確に記憶して趣旨を違えないように伝える。
それを瞬間的に別の言語に置き換える。これが通訳の仕事です。
それから日本語としての正しい表現力も求められています。

通訳の仕事としては、商業通訳、国際会議やパネルディスカッションの通訳、お客様接待、インタビュー、イベント通訳、旅行者の観光案内、テレビなど放送の通訳などがあります。
そのうち、国際会議やテレビなどで外国語を日本語に訳す場合には日本人、日本語を外国語に訳す場合にはその国のネイティブの通訳が通常呼ばれます。何と言ってもその方が語彙も広いし正確な表現ができるからです。

② 通訳には同時通訳と逐次通訳がある

通訳には同時通訳と逐次通訳がある。
どちらもたいていの場合メモを取ることができます。でも、メモを取れない場合もあります。
メモを取れる場合も時間はあまりないので、速記的な記号（ICE）を書きます。
数字、人名、日時、など間違えるのが許されない物は優先的に書きます。
それから、要点だけをざっと書く、余り字が汚くて後で何を書いたのか分からなくならないように注意する。

メモを取れない場合には①②など、私の場合には指を折って要点を覚える。以前は⑩く

らいまで覚えられたのですが、今は記憶障害、まるで覚えられません。その要点をつなげる趣旨を間違えないように思い出します。

メモを取れない場合も多々あるので他人の言葉をできるだけ正確に繰り返す、これが通訳には必要な能力だと思います。

③　メモを取れない通訳で大失敗

メモを取れない通訳で以前大失敗したことがあります。

イタリア人画家を日本に紹介する何百人も集まるパーティーで、郷ひろみさんとか、著名人もたくさん来ていたのだけれど、舞台の上で大柄なイタリア人の画家と二人になったとき、突然、主催者側から「マイク二つだと雑音が入るしスタンドに立てると高さが違いすぎるので、マイクは一つにして、通訳さんが持って下さい」って言われました。

突然のことなので、「エッ、マイク持ったらメモが取れないんですが。。。」と抗議したのですが受け入れられずマイクを持つことになりました。マイクを持つ、と言っても相手は背が高いのでこんな格好。そしたら、その画家さんが通訳になれていないので延々としゃべり始めました。

イタリア人にはやたらと饒舌な人が多いのです。あちらこちらに話が飛んで話し出したら止まることを知らない。芸術家だと言って寡黙かもしれないと安心するのは禁物。私は既にメモを取れないと思ったときに頭がボーットしていた上に次から次へとエピソードやら他の画家の名前やら出て話が止らないので、ますます頭がボーッとして何を言われたのか分からなくなってしまいました。

舞台上だし、何百人の聴衆の中にはイタリア語堪能な人も勿論居るだろうし、今思い出しても赤面ものです。

通訳泣かせという点では今の画家のように長々と話して論点が飛ぶタイプとこちらが一生懸命聞いていても何を話したいのか、論旨がまるで分からないタイプがあります。「何が言いたいのよ」って叫びたい位です。こちらは日本人に多いです。

更に、訳しにくいのは一言一言話す度に言葉を切って通訳の方を向く人です。「私は」と言っては止まり、「行きました」で止まり、「何処へ」で止まり、「何しに」で止まる。そんな人が実際に居たのです。少し複雑な文章になると、何を言いたいのか本当に分からなくなり大変困りました。

④ 通訳のテクニック

そうそう、通訳のテクニックとして、相手が長々と話しているのにこちらが早々と話を済ますわけには行きません。相手が３分話したらこちらは最低でも２分位は話さないと不信感を与えてしまいます。

以前、「カンツオーネ・フェスティバル」というのがあったときに、イタリアから来た歌手が長々と話をしたら、司会兼通訳のロザンナさんが「要するに、日本に来られてとてもうれしい、と言っています。」と訳したのでビックリしましたけれど、ロザンナさんはもともと通訳ではないので仕方ないと思います。

同時通訳はとても神経を使うし、数分で疲れてしまうほどですが、何を話されたか覚えていなくても、次から次へと言われたことを訳せば良いので、論点が易しい場合にはやりやすいように私は感じます。ただ、難しい表現や、単語が出てきたり、何を言いたいのか趣旨や着地点が判然としない場合にはやりにくいです。

ですので、事前の予習はより丹念に行います。それに、瞬発力がより必要となります。今の私には直ぐに言葉を思い出す力はもはや無く、簡単な日本語でも「ほら、あれ、あれよ！」などと言う始末です。

⑤ 通訳は他ではちょっと無いような経験もします

通訳は他ではちょっと無いような経験もします。
ずーっと昔ですが、手形割引で大もうけした会社の社長に呼ばれたことがあります。その会社は何か不正をしたらしくてもう昔に倒産しているのですが、手形割引を発明したのは１６世紀イタリアのメディチ家だ、と言うのでイタリアを崇拝しているのです。

田園調布に大豪邸を建て、そこにイタリア製の１日に数センチしか織れないようなカーテンを入れ、イタリア人の壁画家に天井画を描かせ、その天井画が完成したのでレストランで食事をする、その場の通訳ということでした。

田園調布の家の門を潜ると広い大理石の階段があって、中に入ると玄関も一面の大理石で、小さな犬が２から３匹居て、その犬たちは人が来たのが嬉しいらしくてあちこちに粗相をする。お手伝いさんが「あらあら、だめよお、ちょっとお待ちを、」なんて言って雑巾を持ってあたふたしている。

ビックリしているとそこへ奥様がイブニングドレスを着て現れ、それがシラユキヒメの意地悪の継母そっくりなので２度ビックリ。家の中を拝見。すると、主寝室のベッドの真上に天使の天井画が描かれていて３度ビックリ。

それから、奥様とロールスロイスに乗って赤坂･プリンスホテルのトレアノンという、昔の貴族のお屋敷を改造したレストランに行くと、手形割引王の主人が登場、着くなり、レストランの給仕に「ひげそりひげそり、シェービングクリームも持ってこい！」と命令するのでまたまたビックリ。

彼がひげを剃っている間、私は武富士の社長と話をしていたのですが、それがまたやけに頭の低い人で、「やー、お嬢さんイタリア語ができて良いですなー。お嬢さんの日本語もまた晴らしい」とか「私も家を作ろうと思っているので彼から色々と教えて貰っています。

彼は実に物知りです。」とか手当たり次第に褒めまくるのです。

しばらくして、その人がサラ金王だと知りました。

そのパーティーでは手形割引王がワインを出すときに１本４万円だぞーと４万円を連発して威張るなど、信じられない言動が次から次へとあってなかなか無い経験でした。

⑥ ＮＨＫの通訳

私はＮＨＫの通訳をしていたことがあり、あるとき「今日の料理」という２０分の料理番組でイタリア人の料理研究家と日本人の料理研究家との対談の通訳をしたことがあります。

通訳に呼ばれたときにはできるだけ準備をしていくことにしています。

その日のためには、食材や調理器具の名前、料理技術の名前などできるだけ調べました。

料理というと他の物よりは簡単だとは言え、やっかいな物もあります。例えば、アッォガートという単語は直訳すると「溺れた」となります。でも、例えば「溺れたカリフラワー」では意味が通じないので、「カリフラワーの蒸し焼き＝オリーブオイル､白ワイン、ワインビネガー、塩こしょうを入れた厚手の鍋に蓋をしてジックリ弱火で煮る」というように説明します。

⑦ インターネットという便利な物

今ではインターネットという便利な物があって分からない言葉は直ぐに調べることができますが、もう２５年ほど前になりますが、その頃にはインターネットどころか日本語／イタリア語の辞書も未だ無くて、あるのはイタリア語／日本語の辞書だけでした。

なので、分からない単語があると英語／イタリア語の辞書で調べて、その言葉が正しいかどうかをイタリア語／日本語の辞書で確認するという方法を採っていました。英語の単語が分からない場合には勿論和英辞典のご厄介にもなります。

さて、その時は、二人の料理研究家同士の会話も弾み、通訳も上手くできて、よかったー、と思った途端にプロデューサーから、「ごめん、１分足りなかった。取り直し」と言われてガクッときました。２回目は前回ほど面白い話題も出なかったし、私は疲れ切っていたので最悪でした。

⑧　ＮＨＫ　ＢＳの海外ニュース

ところで、皆様はＮＨＫのＢＳの海外ニュースをご覧になったことがありますか？
ＮＨＫは昔このような番組をイタリア語でもしていたことがあります。
週５回を３人交代で担当していました。

ＮＨＫのビルにはいるには入館証が必要なのですが、私が通っていた報道部へは報道部専用の入館証を提示しないと入れません。中に入ると何時もＴＶでおなじみの国谷さんとかニュース司会者、解説者などがいました。

肝心の仕事ですが。午前中に行って先ず、その日にイタリアから送られてきた番組をプロデューサーと見て、見ながらエピソードの内容を日本語で説明し、どれを採用するのかを決めます。プロデューサーはそれぞれのエピソードが何分何秒かかるかを正確に計ります。それから、選んだものを日本語に訳します。それまでが午前中の仕事。

それからＮＨＫの社食に行って、お昼を済ませます。社食では社員の他に色々な番組で顔なじみの出演者も食事をしています。

食事を済ませて報道部に行くと、その間に、その朝選んだ話題だけを１本に纏めたテープが既にできています。言葉と場面の長さが違わないように時間合わせして、言葉を間違えないように何回か練習をしてから本番の吹き込みをします。吹き込みまでが通訳の仕事です。

この仕事の最も通訳らしい部分は最初のフィルムを見ながらエピソードを説明する部分。その後の仕事は翻訳者とアナウンサーを兼ねた役目です。

仕事を終えると、その辺で暇そうにしている人達の雑談に加わってから帰るのですが、その中の一人、よくＴＶで見るニュース解説員、彼も陽気な人なのですが、その彼に「イタリア語の通訳って皆凄く明るいよね、」って言われたことがあります。

その頃、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語などのニュース放送があったのですが、改めてみると、他の人たちは仕事が終わると直ぐに帰宅していたようです。

私もイタリアに行く前はもっと引き込み思案で温和しかったのに、お喋りなイタリア人と接している内にその習慣が移ってしまったのか、はたまた、イタリア語には人を明るくする魔力があるのかとちょっと微妙な感じでした。

⑨ 通訳は日本語が大切

先に、通訳は日本語が大切、とお話ししましたが、ことにテレビのニュース番組では正しい日本語を心がけます。大勢の方々に正しい日本語を聞いて頂くのはとても大切だと私は思います。ことにテレビなどでは間違った表現は直ぐに伝播して一般の人々が使うようになります。例えば、「方」これはそもそも人を表す尊敬語で、尊敬語なので尊敬語の動詞を使うべきです。

日本語では本来、主語と動詞の一致が求められています。「方」と言ったら「いらっしゃいます」とか「なさいます」とか動詞も尊敬語を使う必要があります。それが、オウム事件の頃、ＴＶで「オウムの方々が続々と逮捕されています」などという報道がなされ、それ以降、例えば逃走犯についてインタビューされた人間が「黒い服を着た方があっちの方向に逃げていったよ」などと言うようになりました。

⑩ インターネットの怖い面

ところで、インターネットは便利と言いましたが、怖い面もあります。

私の知り合いの通訳が、サッカーのザッケローニ監督の通訳をしたときに、その表現は違っている、というのでいつの間にか炎上して個人批判になり、パソコンに彼女の名前を入力すると酷いことが書き連ねてありどうしようも無い事態になりました。

彼女は裁判をして酷い批判のページを削除して貰ったと聞きました。そんな時代に通訳を辞めていて良かった、と思う次第です。

⑪ 通訳は専門性の強い職業

通訳は専門性の強い職業です。イタリア語や英語がいくら上手でもそれだけで十分な事はできないと思います。それは自分の言葉を発言するのでは無いからです。いつ何時に諺など知らないと訳せない言葉が飛び出すか分かりません。

通訳をする前にはその内容を調べます。双方ともにその道の専門家、という場合が多いので専門的な話題になることが多いからです。内容が分からないと訳せないので最低限の知識を得るために必死に調べます。機械なら機械、建築なら建築について、それから、単語を調べて自分なりの単語帳を作ります。その時にはどうやら覚えるのですが、何故だか仕事が終わるとほぼ全て忘れてしまいます。

⑫　通訳の楽しさ

私はイタリア貿易振興会という政府機関で働き、その後、アントニーニというイタリアのジュエリーブランドの広報兼社長をしました。

それらの職場でも度々通訳はしましたが、その殆どの場合には、何を話したいのか、どういう結論に導きたいのかを自分で分かって訳していますので、

専門の通訳の仕事とは大分違っています。専門の通訳として働いた経験はそう長くありません。でも、その間に色々な人と会い、話をし、またとない経験をさせて頂きました。

⑬　ＩＴの進歩はめざましい上に世界共通語としての英語

今や、自動翻訳機や自動通訳機械などが登場していますが、まだまだ不完全でとても信頼きる物ではありません。でも旅行者やちょっとした会話には役立つ物が出ています。

ＩＴの進歩はめざましい上に世界共通語としての英語が更に普及すると、今後、会議などでも通訳が必要でなくなる時代が早晩に来ることでしょう。

ご静聴有り難うございました。